

菊池先生とわが生物学会

（以下は極度の低解像度でほとんど不可読な日本語の文章）

菊池先生とわが生物学会

副会長 本 多 啓 七

去る昭和55年2月10日の新聞紙にて、菊池先生が9日午前零時心筋硬そくのため、両津病院にて、お亡くなりになったとの訃報を見、全く頭に電撃を受けたような感じで暗涙にむせびました。

世は無情とはいえ、昨年の春佐渡でお会いした時のあのお達者な先生のお姿。また再会を告げてお別れしましたのに、全く夢としか考えることはできません。

それにしても、富山県においでの間、いろいろとご指導を賜ったわれわれ会員にとって、先生のお里で再び思い出多いご指導を受けましたが、それが最後の結びとなるとは。それこそわれわれには予知することの出来ない不思議なお招きであったことに深い思いをいたすものであります。

この佐渡研修旅行については、前々から会合のたびに、「一度、初代会長さんをお訪ねして、佐渡の研修会を開こうではないか。」という話題が出ていたのです。たまたま昨年2月の役員会で新年度の研修箇所を相談していたさいに、機が熟したといいましようか、「今年の4月下旬は連休となっているから、この機会に実施しよう。」と話がまとまり、4月早々の総会での賛同を経て、早速準備に取りかかり、二泊三日の佐渡での研修会の運びが進められました。その間先生に電話や手紙で何回となく、具体的な日程についてご相談申し上げたところ、その都度ご懇切なご指導を賜りました。

なお、この計画については先生は大変にお喜びになり、それこそ先生の母校広島高等師範の建学の精神にふさわしい「啼啄同時」にも等しい思いでその日を待ちました。

いよいよ実施の4月28日の午後、参加者18名は5台の自家用車に分乗して、国道8号線を走り直江津港よりフェリーにて佐渡の小木港へと向かいました。だんだんと佐渡の島が間近になるにつれ、慈父の許へといった感じが高まってきました。新潟県の生んだ歌聖、あの優しい良寛和尚さんのお母さんの里が佐渡であることを思い良寛和尚さんの歌、「たちねの母が形見と朝夕に、佐渡の島辺をうち見つるかも」をひそかに口ずさみました。小木で1泊。翌朝4月29日、快晴。いよいよ先生にお会いできる喜びをこめて、一同は元気で沿道の佐渡風物を鑑賞しながら八幡へと車を走らせました。

めざす佐渡博物館に到着すると、先生がにこやかに温顔をほころばして、「やあー、よく来てくれた、待っていたぞ。」といって手を指しのべて下さった場面は、今も脳裡に深く刻みこまれています。

この佐渡博物館の生みの親で、この3月まで館長をしておいでになっていた先生がこのわれわれ

会員一同の訪れを本当に喜んで下さって、館内外の展示物をくまなく案内され、先生の何時も変らぬ張りのこもったお元気な声で説明して下さいました。

「今日はお天気がよいから大佐渡スカイラインが良からう。」とのお言葉。それより春のうらかな陽光の中を車を連ねて佐渡の山地帯の自然探訪を行ない、妙見山近くの白雲展望台で、佐渡一円を遠望しながら、佐渡の地形地質や生物相について、昔と同じく温顔をほころばせながら、情熱をこめてご説明して下さいました。これも忘れ得ぬ思い出となりました。

相川金山では、先生のお話を聞きながら中食、更にノトマイマイの生息地、化石の露出地等といった佐渡の特殊な生物分布地をくまなくご案内いただき、熱心にご説明下され本当に感激いたしました。

晩はドンデン山の宿舎でお泊りいただき、夕食時には懇親会の席を設け、先生を中心としていろいろな懐かしい話題に花を咲かせました。翌朝30日はあいにくの小雨模様でしたが、新穂村のトキの飼育場を案内して下さいまして、係の方から親しく説明をして頂いたり、また加茂湖でのご指導、最後には「日蓮上人の開山である根本寺もよからう。」との事で、その寺をお詣りして両津港に到着したのが11時半。お宅近くでお別れしますといっても、最後まで同車して下さいましてお見送り頂いた時の感激。「先生、お達者で。また来ます。」と言って、先生のお帰りのお姿を見守った印象は今もなお深く脳裡に刻みついています。

なお、先生は心から本学会の今後の発展を祈って下さいました。先生は大正14年に本学会の前身である「富山博物学会」を創設して下さいました。それ以来今日まで五十有余年の間、本学会は栄枯盛衰世のならいにもれず、いろいろと波乱曲折がありました。今日まで自然探究の学燈を燃やし続けていることは偏に、先生が何時までもお見守り下さいましたご加護の賜物であると感謝しております。生物学会創設五十周年記念大会を5年前に開催した折には、先生から特別講演として「佐渡の朱鷺」のお話と、トキのすばらしい生態映画を映写して頂き、その感動は今も忘れることはできません。

昭和55年5月17日(土)の本日、本学会の総会を開きましたが、その席場で、公式に先生が去る2月9日に他界なされ、本学会より早速弔電を捧げ、花輪一基をお贈り申し上げたことを報告し、小林会長の主唱で会員一同起立の上、菊池先生の本学会を創設し、富山県の自然を探究するための学風を盛り上げて下さったご労苦に感謝して、心からご冥福をお祈り申し上げる黙禱を捧げました。

更にわが会として感謝状を贈呈すること、今後発行の本学会誌第20号を「菊池勘左エ門先生追悼号」として、先生の偉徳を偲ぶ記念号とすることが、万場一致で決議されました。これらは先生がわれわれにお与え下さったお教えに対する感謝の一端であります。

今後は先生の崇高なご遺志をわれわれ会員一同は、常に体して生物探究の道に、あるいは生物教育発展のために努めます。

ここに先生の数々のご生前のご指導に深く感謝申し上げますと共に、心からご冥福をお祈り申し上げます。

良寛和尚さんの歌「おきつ風 いたくな吹きそ雲の浦は わがたらちねのおくつき所」とロズさみつ。

先生、やすらかにご永眠下さい。

菊池(勘)先生の忘れられない思い出

第2代会長 進野久五郎

① 教職員としての教化

広島高師博物科を卒えて佐賀中学校3ヶ年の途中、大正10年12月、県立富山高女教諭兼富山女子師範学校教諭として来任されて以来、七年制高山高等学校尋常科主任、魚津高校長、高岡高校長を重ねて、変らざる師弟同行の自然研究が、多くの若い学徒に向学精神を育成されたことは特筆すべきことで、既に前に定年退職した女子師範の生徒だった人々が、今なおその印象を語り伝えているのであり、私も山・川・海に出る度ごとに、いわゆる腰金着のように出歩いて指導をうけて、どうにか一人歩きできるようになったと、感謝にたえない恩人である。

② 富山博物学会から富山県生物学会へ

大正14年、博物科の先輩中田栄太郎、菊池先生、進野と大宮司清治・中村誠喜が相はかり、「富山博物学会」を創設。会員は、小中等学校教師、試験場関係者及び医師の有志で48名だったと記憶している。

フィールドの実地調査、例会、研究発表会を重ね、年会誌の印刷など繰り返したが、いつも菊池先生はリーダーシップであり、いつの例会にも、参考文献並びに関係新刊図書の紹介があり、その刺戟は私の人生の導きとなった。

特に、動植物、岩石地質は自然構成の要素であり、生態関係の研究にも欠かせない分野で、フィールドに出る度ごとに聞いた名称をメモノートに記録して、その夜、図鑑で確かめるのが、初期の大事な研修であったと思い出されることが多い。

初期はこの会に会長を置かず、菊池幹事長と進野理事で運営し、会誌も1～3号まで内容のある

ものを出したところに、戦争となり、相当余分の印刷並びに記録が、疎開予定の前夜、空襲に遇い全部灰になってしまった。白い灰の小山を見て、「あれは何んだろうか」とのささやきは、耐え難い痛恨であった。その後、数年消長もあつたが、また復活継続しているのである。

③ 富山湾生物調査の委嘱

富山県教育会は、郷土教育資料館の設立と科学調査の計画から、昭和4年度から同10年まで7ヶ年、富山湾の生物調査を菊池先生を中心に、故市島与八県水産試験場長、富山中学校教諭延原幸一、富山師範学校教諭進野久五郎にその調査を委嘱されたのであつた。ところが、延原氏は1年で転任するし、菊池先生と私だけとなり、全く私は助手として県内の沿岸、漁場はもとより、雨晴、唐島、虻島、能登島、特に繰返し磯採集に力を注いだのは蛸島の弁天島などであつた。

なお、湾の内部については、発動機船をやといトロール、底曳網などで興味ある材料も入手したこともあつたが、トロールの禁止、定置網の設置が多く、地曳網、手操網より獲物をさがしていた。

富山湾内の海底地形は、海図の測量により略々明らかになっていたが、生物の生態環境として見ると、湾の中央線より西に傾いた海底丘陵の神通山脚で、東と西と異り、東側は海岸より500mを超えないうちに、海陸棚の200mとなり急斜面となっている。これに比して西側は遠浅で、魚類も浅海性、遠洋性のいわゆる青い魚類が多いのに、東部は、宮崎、四方のスケトウダラ、ホタルイカ、ハダカイワシなどの深海性が多かつた。スケトウダラやクロゲンゲなどの深海性の食性の中から研究資料をさがしていたことも学んだ。ただ、伏木、新湊沖合には、いわゆる深い「藍亀」と俗称する深い谷があり、瀬谷と解され、その両側は重要な漁場であることを見た。

今一つ体験から潮流を確めることは、その位置と風向によって様でないが、磯採集にそこが波をかぶらないところから始めることなどで、大切な観察事項であつた。岩瀬浜の海水浴場で、木片を流して波の往復により何れに移動するかを見ると、ほとんど西に流れている。滑川の沿岸に直角に出している護岸堤の底部に砂れきの堆積するのが同じ東側である。このことが、姫川から流れたヒスイが、宮崎海浜に拾われ、同地に玉造り工房が昔に出来ていたことや、庄川からの汚水が、氷見に影響することなど合わせ考える資料と見ているが、菊池先生は、日本海流(黒潮)は日本海に入り、対馬海流となり、沿岸を北流して能登半島の外側を廻り、佐渡を掠めて北上する。湾内においては緑剛崎より沿岸にそいつ針の針と反対の方向に流れ込み、能登、越中の国境沖合より黒部河口に向い、沿岸にそって北上する本流と、黒部川口より越中の沿岸を西に流れて能登との境において本流に合する一支流があり、これが沿岸に浸食などの変化を残しているのである。この潮流の流れる方向と、北東に湾の入り口が開いている富山湾に直撃するように、波浪の入る自然力に沿うよう定置網などの設置が活かされているなど学ぶことが多かつた。

④ 富山湾生物の発表と表彰

前記の通り7ヶ年にわたる調査研究は、並大抵の努力では為し得ない実績で、断片的に学会その他の例会などに発表され、しかも関係大学その他の学者との連絡及び、欧米の旅行中は特殊な専門家の指導を受けるなど、至れり尽せりの配慮により、しかも県内外の文献、博物館員、採集に援助された小坂、進野両氏及び生地、四方の魚市場の各位に謝意を表すと各報告に付記してある。

昭和11年2月11日富山県知事土岐銀次郎氏より「本県教育ニ従事スルコト多年精勵 勳育英薫化ノ効見ルベキモノアリ仍テ銀杯一組ヲ授与シ茲ニ之ヲ表彰ス」とあり、文部省より自然科学研究奨励金200円を交付されたことも見落せない功績であつた。

土岐知事に報告された富山湾の生物の概要は、原生動物30種、海綿動物10数種、擬軟体動物50余種、腔腸動物10数種、棘皮動物40数種、蠕形動物50数種、軟体動物600種、節足動物160余種、脊椎動物魚類310余種、又海藻植物200種、合計1500種に及び、その個体数は万を以って数ふるに至れり。而してこの内同人により富山湾内において新種として発見されたもの蟹類、堀足類、二枚貝、蘚苔類20余種に及び、なお、湾内生物相、並びに分布学上活資料となっていると信んずるのであるが、ただおしむらくは、教育会が計画した「富山県郷土博物館」は古校舎を利用し、標本箱と戸棚若干設備してあつたが、戦災で烏有に帰してしまつた。

なお、この博物館には、故笹岡久彦氏の富山県蘚苔標本500種も求めていたのに、またと入手の見込みはないのである。

⑤ フィールド余録

① 今度の日曜どこにゆくか。早寝の先生に。

下宿住いの二人は、お風呂の帰りいつも立ち寄るのが大宮司君であつた。今夜、先生(菊池)に行つてきめて来ようと、岩瀬小学校近くの公舎を訪ねたら、予想通り照明は暗かつた。9時だから。とにかく奥さんに起きてもらつて、持参したビールを飲みながら、帰りの電車があるから急いできめたのが「東尋坊」である。大正14年だからバスもなく店もない 松林の下に巨大な柱状節理の岩壁が波で洗われているだけの寂しい自然であつた。三国から小舟を頼んで岩石を見ていたら、海女が3~4人「アワビを取らせてくれ」とせがまれ思いがけない経費となつたが、「3人居るのだから何とかかなるだろう」との予想が大違ひとなつた。「心配するな。困ればこれを置く」と金側時計を出して見せた。結局、名刺3枚出して帰つたら送るからで了解できた思い出が忘れられない。

② 潮干狩りのない日本海の磯採集は終日水びたしだった。

広島市を流れている大田川と、これに続いている市内の用水は、満々と水がたたえているかと思うと、2m以上も水位が下つて、過去の動物で異常なかつこのカブトガニが多く、砂上にへばり

ついていたり、浅い水をたくみに泳いでいるのが珍しかった。

ところが、富山湾は大潮でも伏木、阿尾で38cm、七尾湾で45cm、小潮では22cmでほとんど目にもつかない程度であるから、瀬戸内海の潮干狩りなど思いもよらない終日水びたしの採集である。細いアオノリが紐状に10cm内外乾いているか、ヨメガガサ、マツカゼガイ、インダタミなどの貝が乾いている程度である。

③ 小指大のハオコゼに刺されて苦悩する大の男たち

菊池先生が、富山師範専攻科の講師であった夏休み中に、氷見の宿屋に一泊して、翌日虹ヶ島で臨海実験をするので、朝は6時に起床して、町の曳網に手伝いをし、その網にかかった雑物をいただくことになっていた。その研究資料をさがしていたとき、私は左のひとさし指を何物かにさされ、ズキンズキンと傷味が全身に伝わってくる。漁師たちは、それは大変だ。医者に注射してもらいなさい——漁師でも休む人もある——それは「ハオコゼ」だといって小指大の魚を見せてくれた。医者に行ったが、まだ起きてくれない。少々軽くなったから宿に帰った。みんな心配してそのハオコゼは瓶に入っていた。体色は赤で、白～灰の斑紋が目立った。

何年かあとで、調査のひと仕事として、灰付きわかめの産地である宮崎の沖ノ島の採集に二人だけで出かけた。島と言っても波のくだけでわかる程度の岩礁で、地方の呼名メロ貝即ちイガイがたくさん付着していた。

舟を岩に固定すべく、先生がさがしているとき、「アツノ」やられた。」足のどこかハオコゼに刺されたらしい。「とにかく、あがって、組合のお風呂に入ろう。」人並大きい体格の先生を舟に乗せるのにも並大抵ではなかった。まだどなたも入っていなかったお湯に入っていたら楽になつらしく、何一つも採らなかつたのに正午を過ぎてしまった。「今日はこれで帰ろう。」と、おにぎりを食べて帰ったら三時過ぎていた。

④ 僕は東北の山国に育った者。海のゆれ動くのには閉口し、助手も満足にできなかった。

磯採集や、鹿島樹叢でキセルガイやキセルガイモドキの採取や、タブノキの落葉の下から、ピンセットで微小の貝を拾うことには困らなかつたが、沖に出て重いドレッツジで海底をさらい、手操網での採集やブリの定置網など、かなりのゆれをがまんしなければ見られなかつた。

要は、海中に浮いているの仕事は、半人分しかできなかった。むしろ厄介な人間になったと思い、遠方ゆきには中止した。津軽海峡、沖繩、大連—宇品などほとんど船の底に寝てきたことから想像できるであろう。

1980(55年)5月25日記

「菊池ライン」の思い出

第3代会長 植木 忠 夫

私の「菊池ライン」についての最初の発表は、仙台における日本動物学会第17回大会(1943)の講演「越中地方における動物分布に関する問題に就いて」のうちにおいてなされた。

その講演要旨(動物学雑誌・第55巻・第2号・昭和18年)には、“日本海における動物分布の南方系と北方系の水平的境界は、神通川と常願寺川との地帯を富山湾の方向に延長した地帯にあるらしく、富山市は丁度その境界線上に位置する。D・Sジョルダン(1901)は魚類の調査により、野村七平・畑井小虎両氏(1936)は軟体動物・腕足類等の調査によりこの境界線を能登半島上となしたのに対し、多年富山湾の生物相を研究せられた菊池助左エ門氏(1937)は、この境界線は更に東に偏し富山湾を切半する線にあらずやとなしているが、私は菊池氏の説を支持するものである。”と記されている。

そもそも海棲動物の南方系のものとは、印度洋・オーストラリア近海種であり、北方系のものとはアメリカ北部近海種であり、富山湾において暖流の影響するところには南方系生物の分布が見られ、寒流の影響するところには北方系生物の分布がみられるのは当然であろう。しかしこれら両系の生物の分布上の画然たる境界線を定めたることは、四季における海流の移動などにより極めて困難で、その状況は陸生動物の分布に比べて確然たるものではない。おそらく両系種の混生する推移帯は比較的広い範囲にわたっているものと考えられている。

魚類のように移動性の大きいものはともかくとして、軟体動物・腕足類・甲殻類などの沿岸性の比較的移動の小さいものについては、それらの幼生が浮遊性のものである点において問題はあるがともかくそのおおよその水平分布的的境界線が仮定されてもよいのではあるまいか。

菊池氏は実際において、例えばベニエガイ・ヌリマクラ・タガソデ・ウミアサ・ムラクモハマグリ・イシゴロモ・ニシキヒザワガイ・アコヤガイ等の軟体動物、またコワタクズガニ・フタバベニツケガイ・ヘリトリマンジユウガニ・ゴイシガニ・サメハダヘイケガニ等の甲殻類等は、いずれも熱帯性ないし準熱帯性のものであって、境界線の以西、つまり富山湾の西海区に多くみられ、東海区には各種北方系のエソバイ群の存在を証されている。

では地形図上いかなる位置に菊池ラインを引くべきか。これについては、私は偶然にも菊池氏が最も永く居住されていた富山市東岩瀬の海岸を起点として、富山湾の外洋底に向かって突出する神通海底山脚(田山利三郎氏による仮称)の峰つづきに沿うて画すべきが極めて合理的であることを見出した。そしてこれを金沢における日本動物学会第5回中部例会(1943)において“富山湾の動物相と菊池ラインについて”と題して講演しこれを発表した。

その後植物学会において、金沢大学教授正宗敬氏らは“裏日本の植物分布における菊池ラインの検討”と題する研究発表を行い、羊歯類や蘭科植物などの調査によれば、富山県内黒部川から新潟県との県境付近の地帯に、菊池ラインの存在することを証されている。

菊池氏は大正10年12月から、昭和24年5月まで、27年間有余富山県教育界、学界において活躍され、富山県生物学会の生みの親であり、高い識見と実力をもたれた人格清廉の士である。富山湾において百数十回におよぶ海底採集を試みられ、20余種にわたる新種を発見され、欧米にも漫遊されて多くの知名学者の知遇を得ている。

昭和52年5月12日第31回全国野鳥保護のつどいが富山県を会場として開催された。菊池氏はトキの保護、私はライチョウの保護の功績により、総裁賞を常陸宮殿下から親授されたことなど「おかべ」第76号に記した通り、菊池氏はことし2月9日逝去さる。あゝ淋し。

謹んでご冥福を祈る。合掌。

思い出雑記

学会理事 坂下栄作

堂々たる体軀と健康色に、声がよく通って迫力がある、事をなすに当っては誠実で熱意がある。これが菊池先生と初めてお会いした時の印象であった。

昭和2年から御逝去されるまでの五十余年間、直接間接に御指導を受けて来たが、今日でも最初の印象に誤りはなかったと思っている。

旧制富山高校時代には日曜でも登校して研究室で研究に没頭しておられたお姿は、今でも脳裡を去来する、七十余才の老ぼれが、現在なんとか人のうしろからついて行けるようになったのは先生から不知不識のうちに感化されたお蔭だろうと思っている。

でも人により考えは異なるものと見え、日曜は休むべきであって、登校するとは怪しからん奴だと匂わされた官僚的校長の支配下で苦悩したこともある私である。

菊池先生が高岡高校の校長であられた時、安部武雄先生が生物クラブ員と共に後鰓類の研究で名をなされたのは、氏の誠実と熱心さにもよるが、理解ある名校長の下であったという幸運とが合致したからであろう。クラブ員が虹ヶ島や日本海沿岸を採集旅行する際には、堀PTA会長(医師)が度々同行されたと聞いている。

学校、教師、PTA、生徒が一心同体、恐らく全国に例をみない美しい情景ではありませんか。

このような渾然一体のクラブ活動が自然に生れてくれば成果の上らぬ筈はないだろう。

そして菊池、安部両先生なき今日でも、その精神はたくましく脈打っている。勿論今日でも野球などの体育関係の競技には、これに似た態勢を生ずることは珍らしくないようであるが、これは一時的のものである。

菊池先生が高岡高校を退職されて郷里佐渡に御帰りになったとき、富山から太陽が没したように感じますと御手紙を差し上げたことを憶えている。先生が今日まで富山に御在職なされたと仮定すれば、何かお役に立つ仕事が出来たかも知れないと思ひ残念でたまらない。

7~8年前だった。私は魚を求めて北から南へ日本を縦走したある年の盛夏、佐渡に立ち寄り漁港博物館を案内して頂き、一泊させて下さった時、足が少し跛行気味だなど思っていました、長距離を平気で歩かれたし、昨年富山生物学会員と一緒に佐渡研修に行った時は、歩き方は普通だったので百才位はと思っていた。本年2月9日両津市立病院で心筋梗塞のため御逝去されたとの新聞の訃報を何度読み返したか知らない。全く青天の霹靂である。

生者必滅は自然の哲理とは申せ誠に無情を嘆ぜざるを得ない。佐渡へ佐渡へと草木もなびく、そのような大きな影響力を秘めた風格ある大先生の御冥福を御祈りしながら摺筆させていただきます。

“葉っぱに聞いてごらん”

学会理事 長井真隆

富山県小教研会報の昭和46年11月号に、「生徒と私」と言う菊池先生の文章が載っていた。時々、先生を偲んでいた私にとって、懐しい文章であった。おそらく佐渡の磯浜であろうか、子どもたちに取り囲まれた現地指導会の写真も載っている。

多少お年を召された感はあるものの、丸みの顔といい、大きな耳といい、気高さといい、昔のままの先生である。吸い込まれるように文章を読み終え、先生と久し振りに対面したかのような喜びを味わった。文章とは言え、この対面は28年振りである。私が魚津中学に入学したのは昭和18年、その時、先生は校長であったが、私たちの生物の授業を担当して下さった。

「生徒と私」の冒頭に「私が、今日、植物や動物に親しみ、生涯自然に親しみ生きることができるのは、小学校の寺尾篤次先生や、中学校の小原外幹先生のご指導である。……………」

中略……………私が教師となっても生徒と離れないのは、こうした先生方の感化によるものでないかと思う。……………」という一節があり、土の中でビーナツが出来る不思議さ、窓越しに見える小原先生

の勉強の様子などが書かれている。素晴らしい菊池先生にも、こうした感化なるものがあったのかと驚いた。

中学に入学して間もない5月のある日、菊池先生の桜の授業を受けた。桜の葉の切片を、いくつも時計皿に浮かべ、それを顕微鏡でのぞかせてもらったことを記憶している。その時、先生は質問を受けられたので、私は、「桜の葉は落葉するのに、松はなぜ落葉しないのですか。」とたずねた。先生は、歯並みの揃った口もとを一層ひきしめ、しばらくして、「それは、松の葉っぱに聞いてごらん。」と、一言いって、にこにこなさった。一般に先生という者は、知っていることをまじめに教えるものだと思っていた私には、出鼻をくじかれたようであった。しかし、考えてみるとなかなか含蓄のある言葉である。この一言が、先生の人柄とともに、いつまでも私の脳裏に留まっていた。そして、今日でも、ことあるごとに、先生のその言葉が浮かんでくる。私が植物や自然に関心を持つようになったのは、先生の感化によるところが大きい。

「松の葉っぱに聞いてごらん。」の一言には、科学の学び方や自然に対する接し方・見方が内包されていて、まさに自然法爾と言う極致であり、教育の本質でもある。先生は、「生徒と私」の中に、「教えるは学ぶの始めなり」と言う言葉を使っておられるが、これと併せ考えると、教育はまさに相互感化の世界である。文明・文化は、遠い昔からの累積として発達し築かれてきたが、そのランナーは、教えるものと教えられるものの相互感化である。今日の教育は、確かに系統的・発展的・組織的に行われているが、果たしてそれを暖かく包んでいく感化の世界はどうであろうか。人間不在の教育と批判されるのもここにあるようだ。

菊池先生の感化力の大きさを思うとき、私は自問自答したいのである。

◇ ◇ ◇

昭和51年は、富山県生物学会が発足して50周年である。記念講演の講師として、菊池先生が久しぶりにご来県なさった。「生徒と私」の文章が機縁となって、論文を交換したり、日常的な文通もしていたが、直接お会いできたのが、これがはじめてである。なんと33年振りのことである。先生は、はりのある声で、「佐渡のトキ」を講演なさった。年令を感じさせない若さである。学究者として、佐渡の自然をこよなく愛していらっしゃる先生の生き方が、ほとぼり深い感銘を受けた。

その感銘もさめやらぬ昭和55年の春、先生の御命終の悲報に接した。先生から頂いた論文や書状を仏壇に供えてお参りした。書状を読みかえしてみると、いかに富山を心の故郷としていらっしやっただかが、あらためて思いやられ先生の人柄の底辺の深さをしみじみ味わった。二、三紹介する。

◇ 富山県で29年間お世話になりました。山に海に親しみました。多くの友を得ました。

立山の御製は富山県を離れても感銘の深いものです。 昨年

天皇陛下は古稀、私は喜寿、入江侍従長に無理にお願いして書いて頂きまして、早速表装して立山を仰ぐ思いで雄々しく生きようとしています。(昭47年)

◇ 浅間山荘殉職の高見さんは富山の人ではないかと心がかりでした。やはり魚中関係者でしたか。ご冥福を祈ります。(昭47年)

◇ 貴著をお恵み下され誠にありがたく厚くお礼申し上げます。地方の人が、その自然を研究されることは大切なことと存じます。日常接する自然を理解し味わうことは幸福なことと存じます。(昭48年)

◇ 29年間富山の動植物に親しんだ私は死ぬまで富山は心の古里です。

8月26日旧制富山高校の50周年の記念式典があります。おめにかかれるものと期待しております。(昭48年)

◇ 貴著「富山の人と植物」御恵送下され誠に有難うございました。吸いつけられるように味読しています。なつかしいことなつかしいこと飛んでいって語りたい衝動にかられます。是非富山生物学会の研究発表会でもあって集まれる時があればお会いしたいと思います。

今日は東京で、自然保護憲章制定国民会議がありました。富山代表の小林貞作富大教授と野島福三郎氏、国分和夫氏にお会いしました。その時、貴著を示し船中、車中拝読しているところです、富山生物学会の研究旺盛をたたえました。(昭49年)

◇ この度のご栄転おめでとうございます。私が富山にいるころから科学博物館建設の構想を持ち、県・文部省に働きかけたのですが、戦時中のこととて実現は見られませんでした。この度、富山市という地方自治体が、それを実現されることは本当に意義あることです。市民の博物館ですから、その心を心として大いに期待申し上げます。(昭52年)

◇ ◇ ◇

先生は「生徒と私」の中で、生徒はすでに万を超えていると述べられておられる。私もその生徒の一人であることを誇りとし、また、先生が佐渡博物館長として、その生涯をお閉じになられた博物館の道を歩む者として、先生との出会いをこれからも大切にしたい。

菊池先生と佐渡のトキ

学会幹事 本 多 省 三

昨年佐渡研修会の折、今は亡き菊池先生のご案内で、新潟県トキ保護センターを訪れる機会に恵まれた。ここにトキの保護のためにご尽力された先生への追悼の意味で、今や絶滅の危機にさらされているトキについて、さらにその保護について少しく述べ、先生のご冥福を祈りたい。

トキ *Nipponia nippon* は鶴鷺目、朱鷺科、朱鷺属の鳥で、かつては広く日本各地にみられたが、乱獲によりその数が減少、昭和初期には佐渡、能登、隠岐に生息するのみとなった。さらにその後、能登と隠岐のトキは絶滅し、佐渡のみとなってしまった。その頃はそれでも、大佐渡、小佐渡で100羽前後のトキが棲んでいた。

現在では、小佐渡の東部地区の山中に6羽と、トキ保護センターで飼育されている1羽の計7羽が確認されるだけとなってしまい、絶滅の危機にひんしている。

トキはその名の通り、白い羽の裏側は淡紅色をしており、飛び立った時の色、姿は実にきれいでサギに似ているが、足が短く、どっしりとした形をしている。

トキ保護センターに飼育されているトキは、金ちやん1羽(♀s. 43. 3. 15~)とクロトキ4羽であるが、静かな山あいの新穂(にいぼ)池の近くに、タテ8m、ヨコ16m、高さ6mのケージがつくられ、注意深く育てられていた。

また周辺には、野生トキ用のエサ場(かつての水田)もつくられて、いつ野生のトキが飛来してもよいようにえさ(フナ、タニシ、ドジョウなど)が準備されていた。このようなえさ場は佐渡ヶ島各所にあり、各期間の給餌も行っている。ヤマアカガエルもよく食べるので、その卵も入れられている。しかし、オタマジャクシの状態ではトキは食べないようである。

飼育されているトキのえさは肉が主で、マトンのひき肉がだんご状にして与えられていた。人工的なえさにしたのは、自然のえさには寄生虫などがいて、それを食べることにより、病気になったり死ぬことがあること。年中は自然のえさは補給できないなどの理由による。餌づけには一週間ぐらいかかったが、なんとか慣らして1日150~200グラム与えているそうである。

さて、トキの今後の保護と増殖をどのようにしていくかという問題を考えるに、これまで人工ふ化実験などのいろいろな試みがなされているけれども、なかなか成功しないので、その打開策の一つとして、トキ保護センターの近辻主任は次のように話していた。

「菊池勘左エ門先生などの御努力で、約1000ヘクタールの国有林が確保され、さらに9000ヘクタールに近い鳥獣保護区が設定されているが、今のままではなかなか増えていかない。そこで雄のトキを、なんとか1羽捕獲し、センターで飼育している雌の金ちやんの相手にしたい。金ちや

んはその羽の様子や行動からみて、まだまだ卵を生み育てる力がある。」

ともかく、なんとか1羽捕獲したいということであった。佐渡では無理とすれば、外国では朝鮮で1羽確認されており、まだいることも十分予想されるので、朝鮮あたりからの移入も考えられる。しかるにトキの生息域は丁度南北の境界あたりということで、南北問題のこともあって容易には手に入らないようである。しかし、なんらかの方法で1羽捕獲して飼育し、子供をつくってずっと生きつづけてほしいものである。

卵をカラスにとられるなど、卵を守る能力や子供を育てていく力にやや欠ける、繁殖行動の弱い鳥であり、また、えさはフナ、ドジョウ、タニシ、カエルなどの動物しかとらないとか、山あいの水田がなくなるとエサ場がなくなるなど、日々の生活そのものに生きていく上で不利な面があって絶滅は時間の問題かも知れない。

しかし、かつてのその繁栄ぶりを考えるに、今はその数が乱獲により少なくなったのでこの問題がでてきているとも思われ、ある程度の数が復活すれば、また生きつづけることも十二分に考えられるのである。

「グアオ、グアオ」と鳴くトキ、国際保護鳥トキ、絶えかかっている生物を救うことは、なかなか容易ではないが、多くの人々の協力と国の財政的援助によって、かつてのように日本の空を翔んで、永久にその美しい羽色をみせてほしいものである。

そして今、なくなられた菊池先生のためにも、是非トキを救ってやりたい、生きつづけてほしいと切に思うのである。



清水平の新潟県トキ保護センター



トキの麗姿

佐渡ヶ島の印象

学会理事 大野 忠 廣

私は昨年4月28日から他の先生方のお伴をして、生れて初めての佐渡へ二泊三日の旅をした。元来、私は地学専攻で生物学には全くの素人であるが、太陽系の惑星中、地球のみのもつ生命現象に対し、また、自然の妙理に対して若干の興味をもっていたし、それに3年前より本学会の末席をけがさせていただき、いろいろ御指導も受けているので、本多副会長の依頼に応じての拙文をものした次第で、生物学的な記事に乏しいので本誌に掲載していただくには相応しくないものと考えている。

この旅に対する第一の魅力は、長らく富山県の教育に莫大な尽力をなされ、高岡高校長を最後として郷里佐渡に帰られた今は亡き菊池先生にお会いできるということと、科学者として命名高き先生が佐渡の自然に対し我々のため直接ご案内下さるということであった。

果たせるかな菊池先生には齢八十を過ぎておられるにも拘らず、矍鑠として極く最近まで佐渡博物館長として敏腕を振られた由である。

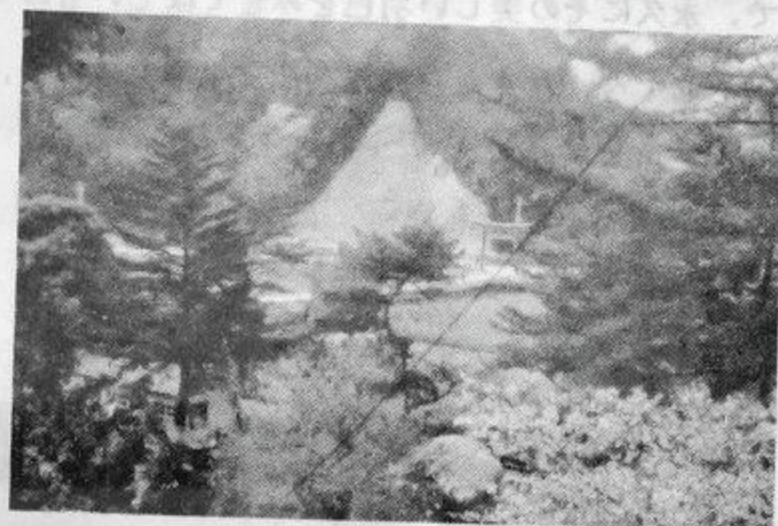
われわれは初日、直江津より出航し小木の国民宿舎「こさど」に一泊、翌朝佐渡植物園を見学したが、ここもよく佐渡の植物が蒐集され、特に「ツバキ」などの暖地性植物が目立った。

(写1, 写2, 写3)

対馬暖流のつき当たるこのあたりには「ミカン」などの暖地性植物もみられるという。



写1 国民宿舎こさど前より遙かに小木港方面を望む。立てるは坂下先生



写2 佐渡植物園の高地より下を望む

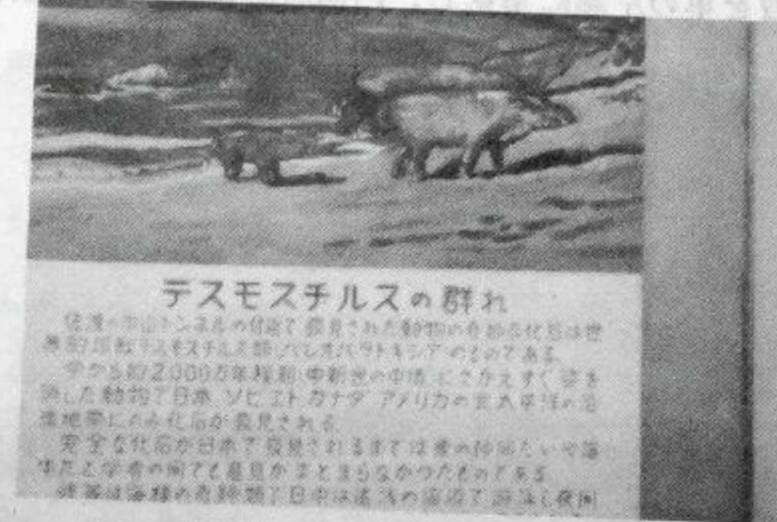


写3 佐渡植物園内のハカタシダ

ついで待望の佐渡博物館に向かった。菊池先生には態々両津市のお宅より我々一行をお出迎えていただき恐縮した。上記の如く、この博物館は菊池先生の遺業が随所にみられるわけで、例えば佐渡に産する動植物等は完全に網羅蒐集されていることは勿論、地学的にも他の博物館に見られぬ興味あるものが展示されている。(写4, 写5, 写6, 写7)



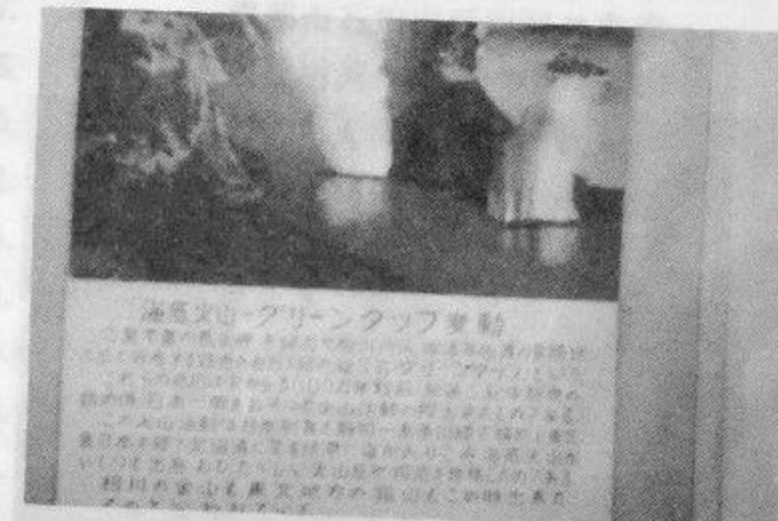
写4 岩石園をバックにされたありし日の菊池先生の御英姿



写5 館内展示の一部 デスモステルスの群れ



写6 岩石園の一部 スコリアン凝灰岩

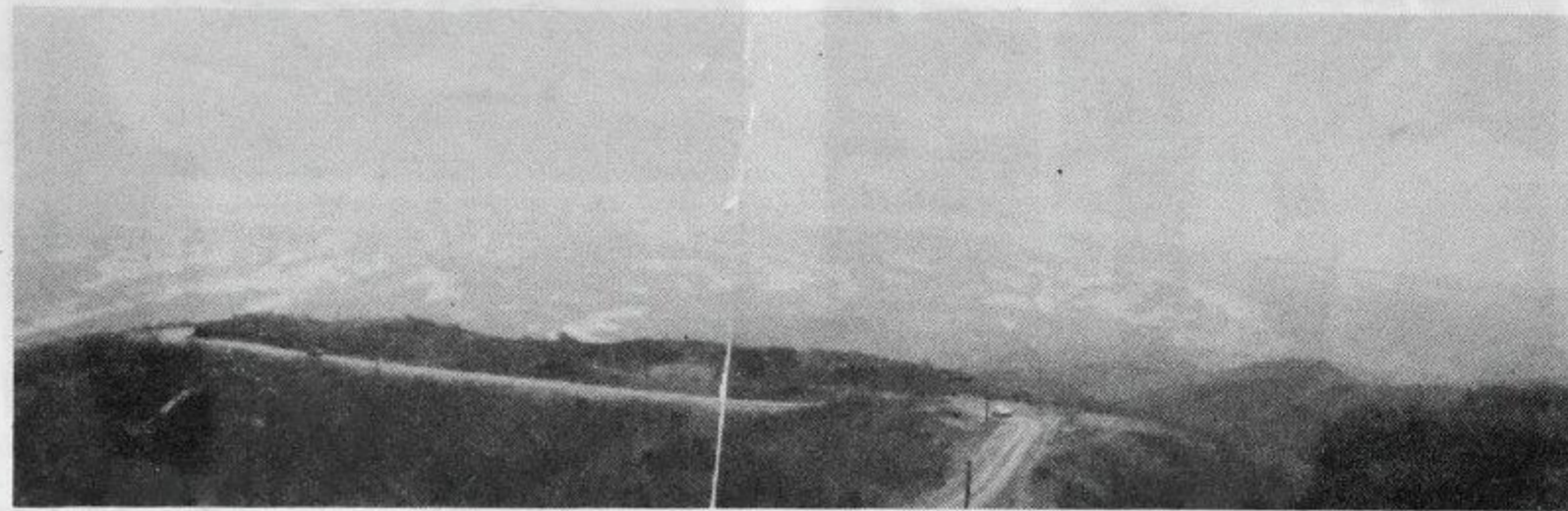


写7 館内展示の一部 海底火山—グリーンタツフ変動

菊池先生には佐渡博物館見学後も、3日目の見学地「トキの飼育地」まで終始我々を御指導下されたが、特に白雲荘より展望した景観では、かつて地形学者により唱導された所謂、大佐渡小佐渡両山地間の国中平野が能登の邑知潟地溝帯に続く地溝(断層地形)であるとの実感を深めることができた。(写8)

また、多くの佐渡観光客が必らず訪れる金山では、江戸時代の無宿人の悲惨な状況が偲ばれたこと、昔の日本の鉱山の実態をよく再現している点で、極めて高く評価さるべきのものであるとともにアメリカなどでは日本の如く国全体が国立公園という訳ではないから、日本人の振り向きもしない鉱山などへの観光客もあり、従って鉱石を貼付した絵葉書を販売しているが、我国もこの佐渡金山のような廃坑などを教育的観光地として生まれ変わらせる方法があってもよいと思った。

尖閣湾に臨む新潟大学の臨海実験所を見学し(写9), 外海府約50キロメートルの海岸を東北上した。この海岸は完全な僻地であったためか貧弱な家が多い。しかし、その中に民宿や土産物店が点在することは、特に都会人の岬端や離島を求める観光精神に、最近のマイカー時代が拍車をかけたものと思われる。私と同姓の大野亀(安山岩の岩脈, 写10)や、佐渡の最東北端弾崎灯台を車の左窓に望見し、内海府海岸を南西へ両津を経て大佐渡ロッジに2日目の宿をとる。



写8 白雲荘より国中平野及び右に真野湾を経て、小佐渡山地を遠望する。



写9 新潟大学臨海実験所前にてシャリンバイを囲む後姿の菊池先生と本多省三先生



写10 外海府の一部より大野亀を遠望する。



写11 左方の丸屋根がトキ飼育場

翌30日、待望の「トキ」の飼育地に向う。車で約2時間余、紆余曲折した山林中、高い金網に囲まれたこの飼育地は、恐らく一般の観光客には手許に地図があっても判りにくい所だろう。

幸いにして我々は菊池先生に引率していただいたので無事見学することができ、所員の方

より縷々案内説明をしていただいた。(写11)

思うにトキが現在、佐渡においてのみ僅かに余命を保っているのは、偏に菊池先生の教育的情熱と、孤島民の純朴な心の賜であるようにも感ぜられた。しかしここも臆て自然愛護精神のない殺伐とした心の持主や、工業の進歩による都会人の公害もちこみなどで絶滅することも考えられるので、一日も早く関係者の対策が望まれる。

根本寺(日蓮流の三昧堂)を見学、多くの収穫を得た佐渡ヶ島を後に、両津港より帰路についた。

最後に、丸二日間にわたり佐渡の本当の姿を教えて下さった菊池先生に満腔の謝意を捧げると共に、この企画を組まれた本多副会長に厚く御礼申しあげる。

最近接した県内の帰化植物

本多啓七

1. オオブタクサ	昭和47. 7	黒部市石田出戸川河口左岸
2. マルバクワモドキ	// 46. 7	黒部川河口右岸
3. ホウキグサ	// 55. 7	神通川大橋付近河川敷
4. ヨモギギク	// 52. 6	富山市富山第一高校の校庭
5. ペニバナボロギク	// 55. 10	小矢部市宮島峽の路傍
6. ヤナギバヒメジョオン	// 54. 8	黒部市三日市の路傍
7. ハルジョオン	// 46.~48.	県内歩道で爆発的に繁芽
8. チョウセンシオン	// 52.~54.	県内各地に点在
9. サンシチソウ	// 54. 10	宇奈月町愛本橋右岸路傍
10. ブタナ	// 50. 10	頼成の森 54. 8 黒部市
11. イヌカミツレ	// 50. 9	立山の室堂手線化地
12. キヌガサギク	// 54. 10	常願寺川常盤橋下の左岸河川敷
13. オオハンゴンソウ	// 49. 8	黒部市三日市路傍
14. アカミタンポポ	// 54. 8	県内各地でみる。だんだん拡大分布
15. ノジヤ	// 48. 4	神通川大橋右岸堤防上
16. シロバナシナガワハギ	// 55. 6	朝日町笹川路傍
17. コウマゴヤシ	// 48. 5	高岡市城光寺路傍
18. コメツブツメクサ	// 54. 8	利賀村百瀬路傍
19. ホソアオゲイトウ	// 50. 9	黒部市三日市路傍
20. ヒゲナガスズメノチャヒキ	// 54. 6	朝日町宮崎海岸
21. ナギナタガヤ	// 54. 6	//
22. シラゲガヤ	// 54. 6	//
23. ノギナシセイバンモロコシ	// 52. 7	黒部市石田の出戸川河口左岸

菊池勘左エ門先生の業績集

1. 文献・発表目録

- 1925 有明海の生物について 第2回研究発表会
- 1926 越中蛆について 第4回研究発表会
- 1930 富山湾斧足類目録(富山湾生物調査目録Ⅰ). 富山教育, (117), 1-7.
富山湾腹足類・掘足類目録(同上Ⅱ). 富山教育, (120), 1-14.
- 1931 富山湾魚類目録(同上Ⅲ). 富山教育, (206), 1-34.
- 1932 富山湾軟体動物目録追補(同上Ⅳ). 富山教育, (220), 1-15.
富山湾の蝦蟹を世界に尋ねて, 富山教育, (221),
富山湾甲殻類目録(富山湾生物調査目録Ⅴ), 富山教育, (227), 1-23.
富山湾海藻目録(同上Ⅵ). 富山教育, (235),
貝行脚. Venus, 3(3), 172-176.
- 1932 欧米視察談 第39回研究発表会
Decapoda Crustacea of Toyama Bay 貝行脚 Venus 第3巻第3号
- 1933 富山湾の貝類(I). Studies on the molluscan fauna of
Toyama Bay. (I). Venus, 4(1), 1-14. (黒田徳米と共著)
- 1934 蝸牛について 付 富山県陸産貝類 第52回研究発表会
クロゲンゲについて 第58回 “
富山湾の蟹類 第 回 “
- 1935 富山湾生物調査目録 第6回報告 海藻類(168種) 富山教育, (255)
富山湾の有孔虫について 第59回研究発表会
富山湾エビジャコ科 第63回 “
富山湾の深海生物 第69回 “
軟体動物採集二束. 博物学会誌, (4), 1-4.
- 1936 富山湾腹足類目録. 富山博物学会誌 第1号
On Ctenocheles balssi Kishinouye について 第73回研究発表会
富山湾軟体動物 腹足類目録 第 回研究発表会
富山湾虹島の生物(其の一, 其の二). 剣(官立富山高等学校尋常科校友会誌), (6),
1-14:(7), 1-14.

- 1937 学名について 第75回研究発表会
佐渡産貝類について 第82回 “
富山湾に関する科学上の種々の問題 文部省, 小冊子, 1-6
富山湾の生物相の概要 広島文理科大学高師博物学会誌, (5), 8-11
富山県下新川郡宮崎村鹿島叢の陸産貝類 富山高博物同好会誌 第2号, 32-41
- 1938 富山湾斧足類目録 富山博物学会誌 第2号
七尾湾の動物数種に就いて 第86回研究発表会
日本の動物学に貢献せし西洋の学者 第90回 “
- 1939 富山湾産腕足類について 第91回 “
富山湾の所謂深海珊瑚について 第97回 “
キザミコダマガイの再発見. Venus, 9(1), 49-50. (黒田徳米と共著)
- 1940 富山県の陸産貝類目録 富山高博物同好会誌 第4号
Catalogue of Land snail Fauna of Toyama prefecture
佐渡の陸産貝類 富山博物学会誌 第3号
- 1941 七尾湾生物の数種に就いて. 博物学会誌, (9), 5-6.
富山湾生物相の研究(一). 1-7. 自己出版小冊子
富山湾生物相の研究 富山教育, (昭15年1月号)
- 1946 富山湾の生物. 富山県社会教育協会青年教育叢書. VI. 43pp.
- 1953 富山湾腕足類. 富山生物学会誌, (5), 1-2.
- 1954 富山湾海胆類. 富山教育, (405), 1-2.
皇居内生物学御研究所拝観記. 志貴野(富山県立高岡高等学校生物クラブ), (6),
57-58.
軟体動物について一殊に富山湾のその分布の状態から. 志貴野, (6), 5-7.
- 1958-1959 沢根の化石(其の一, 二, 三). 佐渡博物館々報, (1), 8-12, (1958):
(2), 1-4, (1959):(3), 1-3, (1959).
- 1959 アメリカの思い出. 志貴野, (11), 6-7.
佐渡島及び近海の十脚甲殻類. 広島大学生物学会誌, (26), 49-51.
- 1960 トキ. 新潟県文化財調査報告書, 第六, 天然記念物編. 29-32, 1地図, 4図版.

1960-1963

- 佐渡島及び近海の十脚甲殻類. 佐渡博物館々報, (5), 1-4, (1960):
 (8), 1-5, (1961): (9), 1-6, (1962): (11), 1-4, (1963).
 1961 佐渡のエビカニ類について. 調理の佐渡, (2), 3-5.
 1962 富山湾で発見された動物. 生物教育研究紀要, 富山県生物教育研究会, (1), 1-8.
 1963 外海府陸産貝類採集記. 佐渡博物館々報, (12), 27-28.
 1965 佐渡の陸産貝類(其の一). 佐渡博物館々報, (13), 6-27.
 苗場山植物調査報告. 苗場山一緊急調査報告書, 1-12. 新潟県教育委員会.
 1966 佐渡の陸産貝類(其の二). 佐渡博物館々報, (14-15), 1-9.
 1967 佐渡の陸産貝類(其の三). 佐渡博物館々報, (16), 1-3.
 1971 中山峠鶴子層より出土した鳥の化石. 佐渡博物館々報, (20), 1-8.
 1969~ 佐渡百科辞典(稿本), 下久知部落誌(稿)

2. 菊池勘左エ門先生が発見された新動物

List of the Animal Species whose Specimens are discovered by
Prof. K. Kikuchi as New to Science.

Anthoxoa

Sphnotrochides kikutchii Eguti

Plecotrochides kikutchii Yabe et Eguti

Polychaeta

Thelepus toyomensis Okuda

Bryozoa

Arachnopsia kikuchii Sakakura

Lyrula multipora Sakakura

Mollusca

Dentalium nivosum Kuroda et Kikuchi ユキツノガイ

Dentalium habutae Kuroda et Kikuchi ハブタエツノガイ

Dentalium toyamense Kuroda et Kikuchi トヤマツノガイ

Dentalium makiyamai Kuroda et Kikuchi ローソクツノガイ

Siphonodentalium (Compressidens) kikuchi Kuroda et Habe

ヒナツノガイ

Tricula minima kikuchi Kuroda シブキモロイツマデガイ

Buccinum tenuissimum Kuroda オオエツチュウバイ

Buccinum rossicum tubai Kuroda ツバイ

Nuculana robai (Kuroda) チリロウバイ

Portlandia kibi (Kuroda) キビンデガイ

Yoldia kikuchii Kuroda ナギナタソデガイ

Yoldia toyamensis Kuroda トヤマソデガイ

Danilia nipponhaiensis Kuroda et Kikuchi (M.S.)

Crustacea

Atergatis toyamensis Kikuchi (M.S.)

Pilumnus toyamensis Kikuchi (M.S.)

Pinnotheres rathbunae Kikuchi (M.S.)

(坂下栄作・本多啓七)

富山県内の低地産タンポポ

大島 哲夫

1. 県内の低地に分布する種類

在来種	エゾタンポポ	Taraxacum hondoense (3x)
	セイタカタンポポ	T. elatum (2x)
	シロバナタンポポ	T. albinum (5x)
	クシバタンポポ	T. pectinatum (4x)
帰化種	セイヨウタンポポ	T. officinale (3x)
	アカミタンポポ	T. laevigatum (3x)